



夏の大会に向けて～部活動・クラブチームの決意表明 Part3

夏の大会が直前に迫ってきました。練習は、今までになく本番を意識したものになってきています。ケガには十分に気をつけて、健康面も精神面も万全な体制で本番に臨んでほしいものです。河東中生としての自信と誇りをもって、今まで仲間と培ってきた練習の成果を存分に発揮してきてください。今号も引き続き各代表者の決意表明をお楽しみください。

【 ソフトボール部 丸谷 優衣さん 】

こんにちは。ソフトボール部キャプテンの丸谷優衣です。私たちの中体連の目標は、筑前地区大会に出場することです。そのために、9年生は約3年間の集大成として最後まで諦めず悔いの残らないようにプレーし、7・8年生とチーム一丸となって頑張りたいと思います！残り少ない練習時間を大切に、その練習時間の中で、チームの全員で声を出すことを徹底し、一つ一つの動きに注意しながら練習したいです。そして、メリハリをつけて、集中して練習に取り組みます。応援よろしくお願いします！

【 女子バレーボール部 岩佐 結翔さん 】

こんにちは、バレー部キャプテンの岩佐結翔です。バレー部の中体連の目標は「筑前大会に出場し勝ち進む」ことです。この目標に向けて、残り少ない練習をチーム一丸となって声をかけ合い、一つでも多くのボールを攻撃につないでいけるように頑張ります。また、試合では今までの練習の成果を全て発揮し、悔いの残らない試合にしたいと思います。試合に出るからには「優勝」を目指して頑張ることが大切ですが、その中でも「楽しむ」ということを忘れずに頑張っていきます。応援よろしくお願いします。

【 ソフトテニス部 南 祐里さん 】

こんにちは、ソフトテニス部です。私たちは7月1日・2日になまずの郷である中体連で筑前地区大会出場を目指しています。団体戦と個人戦の両方があるので、チームやペアで声かけをしながら一球一球を大切に頑張ります。本番まで練習回数が少ないので暑さに負けず全員が声を出して一生懸命プレーしたいと思います。悔いが残らないように、最後まで諦めずにこれまで支えてくださった先生・コーチ・保護者の方に恩返しできるようにチーム一丸となって頑張ります。応援よろしくお願いします。

【 FCグローバル 高橋 怜央さん 】

こんにちは、FCグローバルの高橋怜央です。僕たちは3年生全員で九州大会を目指して練習に取り組んでいます。先月行われたクラブユース選手権では、初戦で負けてとても悔しくて泣いてしまいました。なのでこれからの練習や試合で常に結果を残し続けてチームを勝たせられる選手になって、次は高円宮杯という大きな大会があるので、それに向けて頑張ります。そして僕たち3年生は今年で最後の中学サッカーになるのでみんなで仲良く楽しくサッカーをしていくので、応援よろしくお願いします。

幸福をつかんだらどうしたらよいのか？

～幸田露伴（こうだろはん）が説いた努力論という名の幸福論～

明治・大正時代の日本を代表する文豪に幸田露伴がいます。彼の書いた作品の中に『努力論』という名作がありますが、内容は幸福論です。この本の中に「幸福三説」という考え方が示されています。幸福に出会う人とそうでない人の差は、3つのことができるかいないかだそうです。3つとは、「惜福（せきふく）」「分福（ぶんぷく）」「植福（しょくふく）」です。

「惜福」とは、幸福がめぐってきたら全部使い切らずに大切にすることです。使いつくさずに天に預けるような気持ちです。物事がうまくいっても有頂天にならず謙虚にすることです。

「分福」とは、自分に与えられた幸福をひとり占めせず、他人にも分け与えることです。自分の幸福をおすそわけする、周囲を幸福にすることがまわりまわって再び自分に返ってくるということです。

「植福」とは、今だけの幸福に満足せず、将来のために幸福の種をまいておくということです。それは、自分の代だけでなく子孫の幸福まで考えるという壮大な発想を意味しています。

河東中のみなさんに置き換えると、今の自分の楽しさやうまくいっていることを自分のものとして大切にすけれども、周りの人にも分け与え、後輩たちへも引き継いでいくように考えることではないでしょうか。

さて、110年前に書かれたこの作品をもとに廣川州伸さんという作家が「幸福と柿の木」という寓話にしていますので、少し改作して紹介します。

ある村に、いつもにこにこ顔のおじさんが住んでいました。おばあさんに先立たれて一人暮らしをしていましたが、それでも毎日、つつましい生活をしながら、明るく元気に暮らしていました。

おじさんの家の庭には大きな柿の木がありました。毎年秋になるといっぱい実がなりました。

おじさんは柿の実がなると、全部はとらず、一部を残して収穫しました。取り残した実は鳥たちが食べることもあれば、熟れすぎて落ちた実が地面の肥やしになることもありました。

収穫した実もすぐに食べる分以外は、あとで食べられるようにと干し柿にしたり、近所の人たちに配って回ったりしました。そのため、村人たちからありがたがられました。

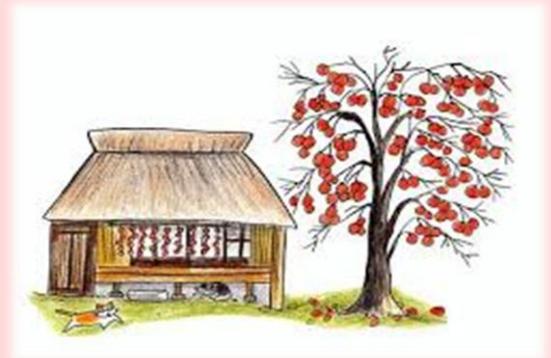
ある日、おじさんはその柿の近くに新しい柿の木を植えました。

村人たちは、「今さら若木を植えても、おじさんが生きていうちに、実ができることはないだろうに」と言いました。

やがて、おじさんはある朝、静かに息を引き取りました。

それから数年が経ちました。

おじさんが植えた柿の木が成長し、たくさんの実をつけました。前からあった柿の木は老木になり、ほとんど実はなくなりましたが、新しい木のおかげでおじさんが亡くなった後もずっと、秋が深まると村人たちはみんな美味しく食べたそうです。



この寓話には、みごとに露伴が唱えた幸福三説が象徴的に描かれています。「惜福（せきふく）」「分福（ぶんぷく）」「植福（しょくふく）」がそれぞれどの箇所にあたるのかみなさんわかったでしょうか。